
ハヤテのごとく ～別れ……そして～

ネメシス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ハヤテのごとく　　ゝ別れ……そしてゝ

【Nコード】

N64270

【作者名】

ネメシス

【あらすじ】

ヒナギクたちもとうとう高校を卒業して、新しい明日へと向かって進んでいく。

時計塔で私物を片付けているヒナギク。

しかし、その表情は優れない。

まだ彼女はその想いを、その心に秘めている想いを伝えていない。

ネメシスが短編第4弾。
どうぞよろしくお願いします。

(前書き)

ネメシスの短編第4弾。

今回はハヤテのごとくです。

これも私が以前に某投稿掲示板に乘せていたものを書き直したものです。

ちなみにこれを書いたのが4年ほど前なので色々と原作と比べてお粗末になってしまいかもしれませんが、それでもよろしいといってください方、どうか最後までよろしくお願いします。

あ、ちなみにこのSSを見てもわかりますように私はハヤテ×ヒナギク派です。

異論は認めます。

「ふう、これで大体は片付いたかな」

生徒会室でヒナギクは私物の整理をしていた。
それほど私物を置いていたわけでもなかったので、肩掛けのバッグ一つで十分間に合った。

「今日でこの生徒会室ともお別れか。生徒会長をやっていたときは感じなかったけど、いざ離れる時になると何だか寂しい気分ね」

ヒナギクは三年生になり、卒業式を終えた。

ヒナギクは三年間生徒会長を務め、その証の銀時計も三個もらっていた。

他の人たちはというと美希、理沙、泉達三人組は三年間かわらず仲良しでいろいろ騒動を起こしたりしてヒナギクの頭を抱えさせたり、ナギも今だ引きこもり気味でマリアやハヤテを困らせていたり、姉である雪路もいまだにお酒が大好きだ。

(……お姉ちゃん、いつか本当にアルコール中毒で倒れるんじゃないの?)

なんだかんだ言ってもやはり雪路を心配してやまないヒナギクである。

「本当に、あの頃とちっとも変わらないな。まあ変わったと言えば歳が増えたことくらいかな、ハハハ・・・ホント・・・それだけ」

ヒナギクは、あの頃と余り変わらないことに少しだけ悲しさを覚えた。

この三年間、ヒナギクの片想いの人物であるハヤテに、まだ自分の想いを伝えられていなかった。

伝えようと思ってもしざいというときにはその勇気が出て来なかった。

今まで何度もチャンスがあったというのにだ。

まあ、それもひとえにヒナギクのツンデレ属性も働いてのことでもあるのだが……。

「このまま友達の間で終わっちゃうのかな」

いつの間にか、その両の瞳から少し涙がにじんでいた。

陰鬱な気持ちの中、ヒナギクは荷物を持ちそのまま生徒会室を後にした。

エレベーターの前に立ち、ボタンを押そうとした。その時、まだ押していないのにかつてに扉が開いた。

「あ、ヒナギクさん」

「ハ、ハヤテ君!？」

中から出てきたのは、先程まで（今もだが）自分の頭を悩ませていた張本人であるハヤテだった。

「どうしたの？ ナギもみんなも、もう帰っちゃったわよ」

「いやー、お嬢様と一緒に部屋敷まで帰ったんですけど、生徒会室に予備の服を隠しておいた事をすっかり忘れていまして、取りに来たんですよ、アハハ」

そう言いユルイ顔で笑っているハヤテを見ると、毎度のことながら軽く殺意がわいてくる。

（まったく、アナタのことでこんなに悩んでるっていうのに、もう少しシャキッとしなさいよシャキッと!!）

「あ、あの、ヒナギクさん、何か？」

どうやら自分の考えが表情に出ていたようで、ハヤテは少しあどずさっていた。

「ふう、何でもないわ。それより早く取ってきなさいよ。待っててあげるから」

何事もなかったかのように心を落ち着かせ、表情をもとに戻しハヤテにそう言う。

「は、はい。では取ってきます」

そういうとハヤテは脱兎のごとく生徒会室に走っていった。

（まったく、少しは私の気持を察しなさいよね！）

そうは思ったが、結局ハヤテは超がつくほど鈍感だから無理だろうと言うことにたどり着く。

まあ、第三者から見ればヒナギクのはやてに対する想いは丸わかりだったりするのだが。

それが原因でハヤテは周りのヒナギクファンたちから恨まれているのだが、本人たちの知るところではなかった。

そんなことを考えているうちにハヤテが生徒会室から戻ってきた。

「お待たせしました！」

「じゃあ行きましょうか」

「はい！」

そうして二人は生徒会室のある時計塔をあとにした。

「そう言えば、ヒナギクさんはこれからどうするんですか？」

ハヤテがそう聞いてきたのは、ちょうど校門をぬけたときだった。

「そうね、とりあえず、海外の学校に留学しようと思ってるわ」

「そうですか、それではしばらくは会えなくなってしまうですね」

ハヤテは少し残念そうな顔をしていた。

（これってやっぱり友達としての残念さなのかな）

「あら、もしかして私に気があって会えなくなるのが寂しいのかしら？」

ヒナギクは少し冗談で、でも少し期待している気持でそう言った。
するとハヤテは顔を赤くしてうつむいてしまった。

（え、これって…）

「そ、そんなんじゃないですよ!？」

ハヤテは顔を上げていった。顔はまだ少し赤い。

「まあ、確かに寂しいですけど、それだけですよ!!!」

「そ、そう」

（やっぱりハヤテ君、私に気なんかないのかな）

それからお互いに気まづくなったのか、しばらく二人は何も喋らずただ歩いていた。

「そ、それでは僕はこっちですので」

ハヤテがそう言ったのは二人が分かれ道に来たときだ。

「う、うん……さよなら」

そう言うと二人は背を向けて歩きだした。

（もうこれっきりハヤテ君には会えないのかな。この気持ち……伝えられなかったなあ）

実は、ヒナギクが外国に行くのは三日後。その間いろいろと準備があるからたぶんハヤテには会えない。

そう思うとなんだか悲しくなってきた、ヒナギクの目には涙が少しずつたまってくる。

「ヒナギクさん!!」

と、突然後ろからハヤテが声を掛けてきた。

ヒナギクはたまっていた涙を急いでぬぐいハヤテのほうを向いた。

「な、何よ!!」

「ヒナギクさんはいつ外国に行くんですか？」

「え？み、三日後だけど」

「そうですか…」

ハヤテは少し考えるような素振りを見ると、顔を上げてヒナギクに向かって歩み寄ってきた。

「な、なに!？」

ヒナギクの前まできて止まると、ハヤテはヒナギクの目を見つめる。

「…やっぱりこのままお別れするのはいやですから」

「え?」

ハヤテの言っていることの意味がよく分からなかった。

「お別れする前にどうしても1つだけヒナギクさんに言っておきたいことがあるんです」

ハヤテの言葉にヒナギクは戸惑いと期待が混じったような気持ちになった。

もしかしたらというはかない気持ちが。

「ヒナギクさん!」

「は、はい!!」

ヒナギクはゴクツと唾を飲み込む。

今ヒナギクはとても緊張していた。

これほどの緊張感は今までに一度としてなかっただろう。

ハヤテも緊張しているのかゴクツと唾を飲み込み、口を開いた。

「人間ってキスをするとき、1秒間に2億個の細菌がお互いの口の中を行き来するそうなんですよ!!!!!!」

$\left[\begin{array}{c} \vdots \\ \vdots \\ \vdots \end{array} \right]$ $\left[\begin{array}{c} \vdots \\ \vdots \\ \vdots \end{array} \right]$ $\left[\begin{array}{c} \vdots \\ \vdots \\ \vdots \end{array} \right]$ $\left[\begin{array}{c} \vdots \\ \vdots \\ \vdots \end{array} \right]$

「……で？」

「ふえ！？ い、いえ！ですから、あの！」

「なに、ハヤテ君？こんな別れ際にそんな豆知識ひけらかして一体あなたは何がしたいの、ハヤテ君？」

ヒナギクはさっきまでのドキドキ感はもうなく、沸々と言い知れぬ熱が体の中からあふれ出てきているのを実感している。

そんなヒナギクを見てハヤテは顔を青ざめ、あわあわとせわしなく弁解を考えているようだった。

しかし、そんなこともうヒナギクには関係ない。

とりあえず一発、いつもみたいに正宗でも呼んでボコッてやろうか、そういう思いでいっぱいだった。

「え、ええと！だからどうしたということではなくてですね！その、僕は！ヒナギクさんだったらいいかなあというか、むしろ積極的にお願ひしますというか……！！」

一気にまくしたてるハヤテにヒナギクはピクリと反応する。

（え、なにそれ？つまり、え？つまりそういうこと？）

ハヤテの言葉の意味に気づくと、さっきまで怒りで熱くなっていた頭が一気にクールダウンする。

思えば、ハヤテは以前にもヒナギクを慰めるため……かどうかはよくわからないが、どうでもいい豆知識をひけらかした時がある。

その時と今、状況としては似通っている。

つまり、ハヤテもヒナギクと同じくこういうことに対しては器用じゃないのだ。

器用じゃないなりにヒナギクを気づかったり、器用じゃないなりに想いを伝えようとしてくれたのだ。

そう考えると、自然と笑みが浮かんでしまう。

ハヤテも自分と同じだったんだってやっと気づいたから。

そして件のハヤテはいまだに焦っており、いろいろと言っているようだがその様子も微笑ましく思え、ちよつと悪戯心が芽生えてしまう。

……だから

「ぼ、僕は……アナタのことが……!!」

……
チュ

ヒナギクはハヤテの言葉を物理的に、そしてハヤテの先ほど言った
豆知識通りに口をふさいでやった。

「!!」

ハヤテは驚いているようだが、その驚いている様子も今のヒナギク
にとってはなんだか少しかわいらしく見えてしまう。

……1秒……2秒……3秒

と、時間が過ぎて、ヒナギクはようやくハヤテの口を開放してやった。

ハヤテはまだ放心しているようだ。

「ふふ、これで私たちは6億個の細菌を交換したことになるわけね」

意地悪な笑顔を浮かべハヤテを見つめると、ハヤテはやっと自分を取り戻したのかさっきの出来事を理解しカァッと顔を赤らめる。

その様子にヒナギクは何やら勝ったような気持になり満足感と、同時にハヤテと思いが通じ合ったということによる幸福感がその心を満たした。

「まったく、あんなプロポーズされたら普通、女の子は絶対怒るんだから。私くらいよ、そんなこと言われてもOKしちゃう女の子なんて」

「え？つまり……それって！」

「まったく、ハヤテ君は鈍感なんだから。確認しなくてもあなたが思ってることで正解よ？」

ヒナギクの言葉にハヤテは心底うれしいそうに、もう背後に花が咲き乱れるくらいに笑顔を浮かべている。

本当にハヤテは見ていなくても飽きない、ヒナギクは心底思う。
う。

泣いたり、笑ったり、拗ねたり、困ったり、苦笑いしたり、本当に
その時々によっていろいろな表情を見せてくれる。

そしてこれからも、きっとヒナギクしか知らないような表情も見せ
てくれるのだろう。

そう思うと、ヒナギクはまさに心躍るようだ。

「ヒナギクさん！外国に行っても連絡くださいね！」

……ほら、まただ。

今もまるで子犬のように、尻尾があつたら振り切れんばかりに振っ
てるのではと思えるような笑顔をヒナギクに見せてくれている。

「ええ、もちろん！毎日連絡してあげるからね！！！」

二人は笑い合いそしてそれぞれの帰路を歩きだした。

もう、ヒナギクの心にはさっきまでの陰鬱な気持ちは一欠片も残っ
ていなかった。

留学で離ればなれになっても

悲しくはないと言ったら嘘になる

寂しくないと言ったら嘘になる

……それでも

それ以上に帰ってくる楽しみができたというものだ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6427o/>

ハヤテのごとく ～別れ……そして～

2010年11月1日16時18分発行